

奈良女大家政 北村 君  
近藤 公夫  
○疋田 洋子

1. 包丁並びに包丁使いの作業分析的な研究は未開発である。本研究は I 調理作業の時間分析によって包丁使いの実態を知ると共に II その際所要時間の長い切る動作をとりあげ、その作業音を収録・分析して至適作業面高の検索を試みた。

2. I の分析に用いた献立10種、作業者1名観察者2名、記録式タイムスタディ法による。IIの動作分析については、被験者は熟練者を含めて4名、作業面高は100cm, 90cm, 80cm, 70cm, 60cmの5種、供試材料は胡瓜・大根、作業は薄打ち、作業速度は被験者の自由にまかせた。測定装置については、包丁音を録音器に収録後、積分器・自記記録器を通して可視曲線にかえ、動作の時間間隔と音の強弱・性質などをしらべた。併せて、薄打ちの成果も検討した。

3. 結果としては、I 調理作業時間中の包丁使いは1献立約3～10分で8～25%にあたる。また、一般に包丁使いは調理時間の前段階で行なわれ、種類では切る62%・処理する38%、組板使用の有無では有74%・無25%、使用場所は調理台で73%、流しで26%である。

IIの実験結果については、一般に作業面高による相違は時間間隔・包丁音の強弱・成果の総合判定によったが後二者は前者に比してバラツキが顕著である。また、各被験者の至適作業面高と考えられる高さでは三者の各偏差は小さいようである。